

アメリカの長松

朝 露 生

番頭は獨逸人、殆んど非常識なる代もの、御よし
 なした方は御爲めでせうと、すゝめた人もありま
 したが、意久地なきわが心を鍛練するには、そん
 なところこそ御あつらひ向きですと、飛びこんだ
 のは王府の衣裳會社、この度は半日働きの丁稚
 と身を現じたのでございます。
 風俗習慣を異にして居るこの國にさすらひて、わ
 が國ぶりの眞情を思ふまゝ、味ひつくざんとは、
 鈍子時代の迷見でございました。もとより人情の
 眞清水は東西共通のもの、行路難の地下、堀るこ
 と幾千百尺にして、清冽玉の如きものを掬し得ざ
 る道理はありませぬ。されど鶴嘴も用意せず、シ
 ョアベルも手にせずして、爪を傷け手をけがして

煩え苦しむは愚の極であると思ひます。
 利益交換の外、何等優婉の道念も持たぬもの多
 きこと、まことに憐れむべき國ぶりでございます
 が、絶東の一寒僧、いり豆に花咲かしむる妙術も
 あらなくに、俳々憤々として日を送るとも何をか
 せんと、炎ゆるが如き度他の心をしばし押へてこ
 の精神的貧民と共に同事行を營んで居るのでござ
 います。吾は五時間筋骨を勞し、彼は一弗にみた
 ぬ金を拂ひ、こゝに相互の満足が現成したばか
 り、その外何等人情のくだくしき糸、吾等の間
 をつなぐものなく吾は彼の名を知らず、彼またい
 かにして吾が名をしらん。彼は單にわが財囊の一
 つにして、一週間に五弗を産みいだす代ものなる
 のみ。吾また彼のためには器械の一つにして、よ
 く動きよく廻り、唯彼れ自身のために事を辨じ得

るを以て足れりとするのでございませぬ。氣に入らぬ時の叱咤も怒罵も、何等の怨みあるに
 わらず、彼はそのなさんとすることをなすに過ぎ
 ませぬ。吾またいつまでも彼がために制肘せらる
 と云ふわけにわらず、わが満足に一點欠けても
 グードバイの置土産をすること憚らぬのでござ
 いませぬ。番頭忠兵衛と丁稚長松との日本流の主従
 説から考へると、いかにも亂暴の云ひぐさであり
 ますがこの間に自由自尊の嚴として犯すべからざ
 るものあり、アメリカとてまんざらすてた國では
 ありませぬ。
 よしや劔突目に幾度と吾を襲ふともまさかわが耳
 に穴もあくまじ、さだめの仕事をさだめの時間中
 にかたの如くなさしめんとての責太鼓、これも彼
 が義務と思へば劣等なるその英語も興味ある音楽

でございませぬ。意味もなき罵倒には、吾も悪罵の舌
 鋒すどく、彼の黙を見るまでは主張をかゆるに
 及ばず、思へば田舎寺の青道心が鐘をつくやうな
 もの、強ければ響も大きく弱ければ蚊の、うなるが
 如きのみ、鐘と撞手との間にこの外むづかしきイ
 サクサがないのです。考へて見るとこれもまた一
 種の哲學的境界です。不平も煩悶も漏らすべき余
 地はありませぬ。自ら責めて人に關せず、なすべ
 きことをなしてわが能事する。妄想を盡いて、他
 に註文よるすりも、自らはげましてその日その日
 の荷づくりする、是にいたりては順境も逆境も
 あつたものでない、古哲の所謂、閑事の心頭にか
 くるなくんば即ちこれ人間の好時節、まことに春
 風は徒らに吹かすとうちをむ時もございませぬ。ア
 メリカの旅心や、面白くなりました。

午後は傳道と教育事業のため足りぬ智恵分別をし
 ぼつていつの夜も十二時過にギアスを消すのです
 もの、とても早くは起きられませぬ。窓の下ゆく
 瀛車のとろろきにゆり覺まされて身仕度もいそが
 しく髪はオーランド風の七分三分にすゑ、カラ
 ーは日ごとに白妙の雪冷かならず、靴をみがき上
 衣の塵をブラッシュして居るうちに、厨下に鳴る
 は朝飯の鐘、早起せる二三の青年だちと食卓につ
 き、黙禱黙喫の日本流、七時十五分前に教會をで
 るのでございませぬ。十五分にしてわが働くべき店
 にゆくことが出来ます。吾が眼にふるゝものに他
 日濟度の手を下さん、わがふむ土地に他日嚴かな
 る法城をたてんと、五色の人種絡繹たる街を、聖
 經を黙誦して、歩みゆくころ、道同じからぬも
 のにかたり得るところでありませぬ。

この國にてはさまで大なる店ならねど、仏寺の外
 に大なるものを見たることなき吾身には、三千の
 僧衆大齋會をするやうな大伽藍、五時間の住持と
 なりてわがものゝやうに掃除をするのでございま
 す。番頭は帳場の中にて升にてはかるほどの金貨
 銀貨を數へるにいそがしく、電燈ひとつ徹夜の面
 影をとめて、わが戰友なる黒童の外、店員未だ
 出勤して居りませぬ。商戦の名残りは帳場の紙屑
 にあとをとめて、さきすてたる手紙の袋のみに
 ても大なる籠に一つばいあるのです。大急ぎにて
 そこをはき淨め、直に樓上の更衣室を攻めること
 にいたします。この室は三つ、椅子あり小机あり
 身のたけほどの鏡あり、こゝは顧客の更衣をなし
 または寸法をとるところ、この國の女服は、東洋
 流の方形なるつぎめにあらで、複雑なる曲線の配

合がでありますから、寸法すんぽうをとるに長時間ながじかんを要もちする
のでございます。

黒童くろどうは工場こうじやうと男子服店だんしふくてんとの掃除役きよめ、婦人服専門ふじんふくせんもんの
店故みせゆゑ、彼の働はたらくべき店みせは後方こうほうの一小部せうぶ、一時間じかんに
みたぬうちに吾事わがこと了おりつとつぶやきて、彼かれは自轉じてん
車くるまをとばしそと使つかひ出でるのでございます。

吾われは室むろごとに手てばやく電燈でんとうを点てんじて、ピンや紙屑かみくづ
などを掃はきとり、階段かいだんをくだりて春はるの廣野ひろののやう
な青アライシカレットの塵ちりをはらひ、天幕部テントぶら落おつるやうに点てん在ざい
せる衣架ころもかけの下したまでも、のこる隈くまなく拂はらひ去まりて、
入口いりぐちより帳場やんばまで花蠟くわろうをしきつめ、入口いりぐちの床ゆかを洗あら
ひたるのち鏡かがみの幾いく十じゅうかをみかくのでございます。
あるは三稜柱りやうちゆうにつくりあげたる、ある開ひらき戸どの三
枚合まいあせ、あるは額面式がくめんしきに鈎かぎりさげたる、七人將門にんさまかど
のやうに長松ちやうまつのすがた反寫はんやしたるに驚おどろくこともわ

り、まれに見みるわがうしろすがたに可笑おかしくなる
こともあり、廣ひろきが上うへにも廣ひろく見みせんとての配合はいがふ
中なか々に意匠いしやうをこらして居をります。とかくするうち
に右みぎからまた左ひだりから磨みがける鏡かがみにうつり來きたるは店員てんいん
の婦人レディーたち、美人びじんてんじやう天上てんじやうより下くだるにあらで、紅紫こうしの
裳鏡まきやう上じやうにひらめくもまた趣おもむきありとでも云いひま
せうか。顧客こきゃくの眼めを引ひくやうに着きがざりて、リボ
ンの色いろも、留針ピンの寶石ほうせきも、金の腕環うでわも胸むねの金時計きんどけい
もみなこれ廣告くわうこくの一つとして、新風潮しんふうちゆうの色彩しよくさいと新しん
流行りゆうかうのスタイルとをわつめ盡つくしてゐます。
英語えいごに不調法ふてうぽうなる番頭ばんとうに代かりて矯きやう舌ぜつ々たんく客きやくに接せつ
するは二人ふたりのヤンキーレデー、碧あざき眼めの底そこにはX
光線くわうせんありて客きやくの腸はらわたの奥おくを見透みとふし、黄金色こがねいろの髪かみ
の毛けには人ひとをつなぐの魔力まじやくやどりて、一たび入いり
來きたる客きやくは買かはずんば歸かへることを得えず、いとまわら

ば英京佛京の雑誌を繙きて、六韜三略の工夫怠らず、まことに見るからに勇ましき武者ぶりでござひます。

帳場に居るは書記二人、一人は簿記を掌り一人はタイプライターにてまたくうちに數十通の手紙を認むるのであります。一人は金庫と計算器の係り、幾萬弗の全權はこの織手に握つて居るとの意氣、この人の電話口に立つときは、そのうるはしき聲音店中にひびきわたるのでございます。

樓上には幾十臺のミシンありて笑ひさいめく聲々車の音にも冥没せられず、さくからにたのしげにて、利を争ふのちまたとは思はれませぬ。

店の飾りつけ一と通りすまして、長城の廊下のやうな棚の内面と上部とを拭ひホット一と息するころは着たやほしやのレデーだち、はやひしひし

とつめかけてゐます。そのあとのわが役は陳列場の窓を拭く位のもの、ウオッチはまだ十時半、梯子にのぼりてゆるくと拭きはじめます。高さ二間巾一間ほどの玻璃の一枚もの、三十枚あるのです蠅のとまりしあとや塵のけがせし位はわけもなく落ちますが、いつどうしてついたのか、ペンキの點々こいつ中々むつかしい、ナイフをとり出して一々搔きとらねばなりません。

この國のレデーだち、化粧をするに各種のナイフを用ゐ、顔の班點をけづり去るやうですが、面皮いかに厚しと雖ハンケチにて掩ふほどの容積、それに美しく見られたやの心手下となりてせきたてること故、またくうちにしわがりがりませうが、グラスの御化粧はどうしても二時間近くを費すことになつてゐます、梯の上より見下ろせばあるは良

人の腕にすがり、買ふてはしやの媚を呈して來るもあり、細腰ひらりと肥馬より下ろして銀鞭を手にするまゝ、入り來るあり自働車にて來るもの、馬車にて來るもの、短裳かひくしくかけこむ女學生、幼兒を車にのせて來るマダム、かをらぬ花は帽子の上に色あざやかに、色なき花の香衣袖をもれて百千種の名香一時にくゆらすが如くでありませ。陳列場には十數人の彫像立ちて、これ見よがしの晴着をまとひ、はゞにペンクの色あかく、眉に青春の想あらはに、皓齒嫣然としてうちをむむあり、嬌艶うちむきて恥じらふもあり帽子より手袋のはてにいたるまで、凡そその日のあらゆるものうち第一等のもは悉くかの彫像にまとはすのです。腹はへッてもひもじくないわけならば、一つ彫像となりて大陸の衣裳の粹を着て見るも面

白ひでせう。

かつて幼き時羅漢堂に徹夜して、燈下修禪をなしたことがありましたが、何の宿縁か、落魄四千里こゝに女菩薩に奉侍するやうになりしことよと、自ら笑ひたる時もございます。東海姫氏國の姫御前とても、わが理想の美を眉目のうちに現はしたるは少なさを、ましてや表情の七變化、手をひるがへさぬうちに、嫉妬偏執、瞋恚慳貪まばゆきはどの活動寫真いまはしくて、白哲の美人には、一顧の勞もとりにたくないと思ふて居るものでありませがその日その日に身の皮を改められてうれしうな顔もせず、十字街頭にさらされて、紅閨のうちにやすらふが如く、をめるはつねに笑み黙せるはつねに花唇を閉ぢ居ること愛すべき女性のみでございます。

吾は一々かれ等に名をつけて、勞働の友として居るのでございます、されどわが理想の戀人たる觀音薩埵の如き、端嚴微妙の面影はこの國人をモデルとしてつくりし彫像に、とてももとめられませぬ。三十三に身を現じてあらゆる苦厄をわが苦厄とし、無畏施のまなじり千斛の涙をたゞへ、梵音の御口もとに百千の經卷を藏する底の美人、天上天下二つとはありませぬ。さもあらばあれこの沈黙の彫美人、胸に煩惱の血潮も通はず、求むるところなくしてすがたを現じ居ること、一種羅漢悟の對象として嘉みすべきところないでもありません、合天井に輝くは幾百の電燈、夜半にはいと冷靜の光を放つことかと、眷はしきふしぶしないわけでもありません。窓を拭ひ了りて屋内の電燈ホヤ、などみがき居るうちに正午十二時となるの

でございます。ミシンの秋の音もやみ、タイプライターの音も計算器の音も凡そ店の中のもの音一時にやみて、わが仕事もそのまゝ終りとなるのでございます。五時間の力働、滞りなくませ、綠蔭の涼風に汗を乾かし、渴ける喉をうるはさんと、いつも立ちよるは糖果舗、ソーダアイスクリームの一碗に、アメリカの苦中の甘露づくくと味ひて、さてこれよりは午後の舞臺、吾はた何に身を現じて、わが願輪を轉じやうかと、人浪の中を押しわけてわがホームたる教會にかへつてくるのでございます。

(完)

◎二年間の休暇 米國ミヅリー州フォレストシチーにあるパーリントン鐵道會社の役員ホベイといふ人は一日も缺勤なく四十年間勤めたる爲め此程二ヶ年間の休暇を得たりといふ此間給料は全額を受く善なりといふ。